

一橋大学には、ユニークでエネルギー溢るような女性が豊富と評判です。

彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

第30回は、日経BP社にお勤めの記者、治部れんげさんです。  
聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

# もつと野に咲け、蓮華草

## 暗記より、現場

山下 治部さんは日経BP社で活躍されているかわら、子育てをめぐる問題などについて講演をされたり、ブログやツイッターで積極的に発言されていますね。ジャーナリストは天職といった印象がありますが、一橋大学に入学した当時は弁護士志望だったそうですね。

治部 法廷ものの小説を読んで、冤罪を晴らすなんてカッコいい仕事だな、と(笑)。法律を学ぶことは教養としては面白かったのですが、私の期待したものとは違っていました。たとえば「一票の格差」の問題にしても、結局のところ判断は通説や判例を基準としているわけです。決定的にムリと思ったのは、2年生のときの司法試験の予備校での体験。通説にひたすら赤線を引いて覚える



### 治部れんげ (じぶ・れんげ)

1974年生まれ。1997年一橋大学法学部卒。

日経BP社に入社し、『日経エンタテインメント!』、『日経ビジネス』、『日経ビジネスアソシエ』、『日経マネー』などの4誌を担当。

2006年7月から2007年8月までフルブライト・ジャーナリストプログラムで渡米、ミシガン大学女性教育センター客員研究員。

「アメリカ男性の家事育児分担とそれが妻のキャリアに与える影響」について文献調査とインタビューを行う。

3歳の男の子の母。2011年秋には、第二子が誕生する。

著書に『稼ぐ妻・育てる夫』（勁草書房）。

日経BP社記者

治部れんげ氏



Renge Jibu

商学研究科准教授

山下裕子



Yuko Yamashita

ように指導を受けました。優秀な方々は、こうしたことをきちんとクリア、立派に社会派の弁護士になっていきますが、私にはできませんでした。根が単純なせいも、悪いことは悪いとはつきり語る方が性に合っていたのです。

**山下** 異説の女ですね（笑）。ゼミで強烈な取材を体験されたと伺いました。

**治部** 1年生のときに所属した社会学部の濱谷正晴先生のゼミで、社会調査のアプローチに影響を受け、3〜4年生では、福田雅章先生の刑事政策のゼミでオウム真理教取材を体験、ジャーナリズムの面白さを知ったのです。取材のときは、信者と間違われたいようになるべく派手な恰好でと言われて、アクセサリーをじゃらじゃらつけたりして（笑）。

**山下** 現場で身体を張って、時の問題に飛び込んでいく。法律家からマスコミに方向を切り換えたのは、ごく自然に思えますね。なぜ総合誌ではなく、経済誌だったのですか？

**治部** 日経BP社を受けたのは、あるOBの勧めでした。でも、当時、日経新聞は読んだことがなかったし、経済なんて難しそうで（笑）。入社試験の作文の課題は住専問題またはマスコミの未来だったので、マスコミの論調は偏っているという主旨の作文を書きました。一橋大の学出身の女性は珍しかったので拾ってもらえたのかもしれない（笑）。



## 記者時代にフルブライト・ジャーナリストプログラムで、米留学

**治部** 私は1997年に入社し、当初は『日経エントテインメント!』に配属。3年目に『日経ビジネス』に異動しました。『日経ビジネス』とその次に異動になった『日経ビジネスアソシエ』にいた2000年〜2005年が一番働いた時期でしたね。毎日何件か取材し、夜は社で原稿書き。明け方まで仕事ということもしょっちゅうでした。深夜勤務の場合はある程度までタクシードライバーだったので、その範囲で通える場所に引っ越してしまいました。

**山下** 文字通りの長時間労働ですが、そういう働き方をどう見ていらしたのですか？

**治部** 当時は、長時間労働に嵌まっていた（笑）。労働時間が長いことは、よくやり玉にあげられますが、もし悪いことばかりでしたら、とくに崩壊しているはずだと思えます。まだ若かったこともあるかもしれませんが、上司や先輩社員の方々が熱心にメンタリングしてくれました。お酒もよく飲みましたね。飲

ミューテーションは中高年男性を批判するあたりで議論されることが多いけれど、彼らが部下に与えてくれるものは、やはりすごいものがあると思う。自分のワーク・ライフ・バランスを犠牲にした、ボランティア精神というか、職場や会社に対する無償の愛に支えられていると思いますね。



**山下** 女性が育ててもらっているうちはいいんだけど、女性が部下を育てる立場になるとものすごく大変になりますね。

**治部** もちろん、男性上司の無償の愛が可能なのは、彼らの妻たちが家事・育児などのシャドウワークを一手に引き受けているからです。ただ、夜遅くまで会社に残っていることに妙な高揚感があることも事実です。家庭があり、子どもがいる立場でいえば、夜・お酒だけではなく、昼ご飯や朝ご飯という選択肢もありませんね。

**山下** 無償の愛を何に捧げるか、が、問われてきますね（笑）。日本社会全体のワーク・ライフ・バランスにも深く関わってくるのではないのでしょうか。治部さんがアメリカでの研究をもとに書かれた『稼ぐ妻・育てる夫』は、日本人にとっても有益な示唆を与えてくれるように思います。

**治部** 会社の留学休暇制度を利用し、フルブライト・ジャーナリストプログラムで渡米したわけですが、私自身にとってもさまざまな発見がありました。インタビューした女性たちは高学歴でキャリアを持ち、夫婦で戦略的に役割分担をしているんです。夫たちも堂々と、「僕より彼女のほうが稼げるから」「子どもをちゃんと育てたいから」と語っている。オープンに喋ってくれることに正直驚きました。

**山下** アメリカの男性が積極的に家事・育児をするようになった背景には、80年代後半からの産業構造の変化により中産階級の男性の経済力が低下して、妻たちが働かざるを得なくなった事情があるわけですね。

日本でも90年代以降、同じような状況が起きていく。その一方、男性の育児休業の取得率はまだまだ低いし、子どもを育てるための環境や制度もとても十分とはいえませんね。

**治部** 以前、雑誌で調査したとき、女性が働きやすい会社は、男性の育児休業取得率が高いという結果が出ました。アメリカ人男性が家事・育児に参加できるのは、雇用主と交渉でき、いろいろな制度を利用できるからでもあります。雇用の流動化と実力主義が根付いてい



実感しましたね。

**山下** 夫のサポートと制度のサポート、両方がちゃんとなることが理想ですが、現実には、なかなか、二つが揃いませんね。

るんです。雇用の流動化と実力主義が根付いていすから、仕事ができる人は会社を辞めることができ、時期が来たら再度役割分担して職を得ることもできる。そういうチョイスができるんですね。女性の働き方を考えることは、男性の働き方を考えることと等しいと思います。

## 夫のサポートが妻のキャリア形成に影響する

**山下** 秋に第二子を出産される予定ですが、それに合わせて、夫君が育児休業を取られるそうですね。**治部** はい。夫は研究へのアドバイスをしてくださいましたし、本を書いていたときは生後数か月の子どもを育てながらでしたから、もう無理かもしれないと思ったり、「家事はほかの人でもできるけど、この本はほかの人には書けない」と言ってくれたことが支えになりました。夫のサポートが妻のキャリア形成に重要な役割を果たすか、身をもって

## 対談を終えて

### 「あなたの代わりは誰もいない」

「家事はほかの人でもできるけど、この本はほかの人には書けない」

この台詞、どっかで聞いたことがあると思ったら、映画『ヴィクトリア女王 世紀の愛』だった。アルバート公が女王をかばって凶弾に倒れるクライマックス・シーンである。「あなたの代わりは誰もいない」 れんげ夫、やるなー。

古めかしいヴィクトリア朝を舞台にした台詞が、現代の女性の心を鷲掴みにできるのには、ちょっとしたトリックがある。表面的には社会的に特別な存在だという意味なのだが、根底に、中世から延々と続く、一人の女性に理不尽なまでの愛と忠誠を誓うロマンスの定型をきっちり踏まえているのだ。「社会にとってあなたは特別」を、「僕にとってあなたは特別」がしっかりサポートしている。21世紀の騎士道精神とでも申しましょうか。二重の意味での「あなたは特別」に、21世紀の女性たちは痺れるわけですね。

そう、れんげさんは、特別である。

過激な宗教団体への体当たり取材を行うような、「左」的の学生時代を送りながら、「右」本流の経済誌の記者になってしまう。そして、オジサン社会の中で、とことん働く。それまでは、「僕にとってあなたは特別」レベル、だったかもしれない。しかし、れんげ女王は、経済誌で社会的なテーマを取り上げてもらえるように、どんどん論点を磨いていくのである。これは、「社会にとってあなたは特別」レベルだ。でも、実は、「僕にとってあなたは特別」、と言われ続けた女性こそが社会の壁を突破できるのかもしれない。

「あなたの代わりは誰もいない」というような人が、今の日本の社会に求められているのはあまりにも明白だ。「みんな一緒に」頑張る競争だけでは、新興大国の勃興する世界で疲弊するばかり。世界は、日本に、特別な何かを求めているのだから。

「あなたの代わりは誰もいない」とこっそりささやき続けてきた男性たち、あなたにとっての特別な女性は、世界にとっても特別かもしれませんが。騎士道精神なんて照れくさい、という向きには、江戸の風流はいかがでしょうか。

「手に取るな やはり野に置け 蓮華草」 (山下裕子)

児を保育園に入れるなんてかわいそう」という通念みたいなものもあるでしょう。かわいそうと言った瞬間に、いろんなことがおかしくなる。歪んでしまふと思うんです。現状では公立の保育園は「福祉」の範疇ですが、そろそろ脱却してもいいと思う。子どもに対する投資として、親と切り離し、いろいろ

### 一橋の女性たち

ろなりソースを投入するといった視点があつていいと思います。

**山下** 「高齢者をケアするコスト」と「子供たちへの投資」の間でどうバランスを取っていくのか、これからの国政は本当に難しい。身近な男性に期待するほうが、ずっと、現実的ですね(笑)。

